

平成26年11月27日

学位請求論文（課程博士）審査報告書

学位請求論文：源氏物語の伝来と享受の研究

学位請求者：

文学研究科日本語日本文学専攻 氏名 菅原郁子

審査委員

主査 慶應義塾大学文学部 教授 田坂憲二

副査 専修大学文学部 教授 板坂則子

副査 専修大学文学部 教授 齋藤達哉

2014年9月30日に提出された菅原郁子の博士論文を、上記の三名で審査した。以下に審査内容を報告する。

本論文は、『源氏物語』の写本、残欠本、古筆断簡、抜書、画帖、梗概本など様々な形の資料の伝来と享受について検討したものである。

論文構成は大きく以下の三篇から構成される。

第一篇 専修大学図書館所蔵資料

第二篇 本文の伝来と享受

第三篇 野々口立圃と『源氏物語』

第一篇は、序章以下、第一章 伝冷泉為秀筆『源氏物語』桐壺巻の本文、第二章 伝藤原為家筆『源氏物語』総角切考、第三章 菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』の様相、の三章からなる。

本篇で取り上げる資料は、いずれも専修大学図書館所蔵の『源氏物語』関連資料である。専修大学図書館は、創立者相馬永胤・田尻稻次郎の記念文庫に源を発する伝統ある図書館である。歴代の関係者によって、資料の集積が進められ、国文学関係資料に関しては、旧阿波国蜂須賀家蔵本、菊亭文庫蔵本を中心に貴重な典籍が多く、それらについて考察を加えるものである。

第一章で取り上げた伝冷泉為秀筆『源氏物語』桐壺巻は、伝承筆者を藤原定家の曾孫冷泉為秀とする古写本で昭和十六年に重要美術品の指定を受けたものである。本学図書館の最貴重書の一つであり、早くに名誉教授中田武司氏によって詳細に考察されていたものである。本論文では、中田氏の調査以後に発見された新資料を中心に再度の検討を試み、中田氏の見解を補強するとともに、新見を提示する。特に、従来は廃棄印と考えられてきた冒頭に押された判読不明の印を、書誌学者高木文のものと究明したことは重要である。高木は紀州徳川家の南葵文庫に長く関わり、『源氏物語』の最重要資料である大島本や伝阿仏尼筆本などを直接見聞した人物で、本資料はその手を経ていることが分かった。本論文では、昭和初

期の古書業界の記録なども駆使して、この資料の伝来過程を明らかにした。

第二章では、比較的新しく、今世紀になって専修大学の所蔵に帰した古筆手鑑『墨跡彙考』収載の伝藤原為家筆の総角巻の断簡について考察する。『墨跡彙考』は名誉教授小山利彦氏によって紹介された『夜の寝覚』断簡など貴重な資料を含むものである。総角巻断簡は一葉の古筆切ながら、第一章の伝承筆者為秀よりも二世代上に属する藤原為家を筆者と伝える貴重なものである。この断簡を、本文系統、伝称筆者、古筆鑑定家等々の多方面から詳細に分析し、使用されている仮名文字の字母などから鎌倉期の古写であると断じたものである。

第三章では菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』について考察する。菊亭家とは藤原北家西園寺流で、西園寺実兼の四男菊亭兼季（一二八一～一三三九）を始祖とするもので、鎌倉時代から明治にいたるまで多様な典籍を伝えてきた。今日菊亭文庫は、専修大学図書館、京都大学図書館、東京国立博物館などに分かれて伝えられているが、本学の菊亭文庫は其中でも質量ともに充実している。『源氏物語抜書』はその菊亭家の『源氏物語』享受の実態を知ることのできる重要な資料で、菊亭家が画帖制作を試みた折の草稿本であることを究明した。その成立時期も注釈書『万水一露』との関係から、寛文三年（一六六三）以降であることを突き止めた。さらに、琵琶相伝の場面や、演奏の場面が多いことに着目し、琵琶伝授の家である菊亭家らしい独特の画帖作成の意図があったことを推測した。文献資料の分析と享受の実態を結びつけた優れた考察である。

以上本篇は、専修大学図書館の『源氏物語』資料についての考察であり、中田武司・小山利彦両名誉教授をはじめ専修大学関係者の先行研究のバトンを受け取り、さらに詳細に分析し、正確に位置づけたものである。先人から受け継いだ貴重な文化資料を保管する大学に学ぶものとして、理想的な研究であるといえよう。

第二篇は、序章以下、第一章 正徹本の伝来と奥書、第二章 正徹本の本文－国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に－、第三章 大庭賢兼と『源氏物語』享受、第四章 大庭賢兼筆『源氏物語』の本文、第五章 米国議会図書館本の素姓－行方不明の諸仲本か、の五章からなる。

正徹本は、藤原定家から冷泉為相を経て室町時代の歌僧正徹へと伝えられた『源氏物語』の重要写本の一つで、第二篇ではこの伝本について多角的に考察する。第一章・第二章では正徹本の悉皆調査を行い、奥書や本文の親疎関係について詳細な調査を行い、正徹本が二系統三群に分かれることを究明した。第三章・第四章では、正徹本を校合資料に用いている大庭賢兼筆本と賢兼自身について考察を加えた。本博士論文の特性は、単なる資料研究ではなく、その資料に関わった人々や家系についても目配りをする点にある。享受の主体である人間にも目を向けるのである。いわば血の通った文献学といえよう。この二つの章でも、賢兼筆本と正徹本との具体的な関わりや微視的かつ詳細な分析と、大庭賢兼の伝記、家系、文学活動から賢兼が仕えた大内氏や毛利氏と『源氏物語』との関係まで広げていく巨視的な分析とが見事な調和を見せている。

『源氏物語』の伝本は、大正から昭和期に次々と発掘究明されたが、太平洋戦争の戦災のため失われた貴重な資料も多い。正徹本のうち、金子元臣旧蔵本・徳本正俊旧蔵本などが行方不明となった。そうした資料のうち最も有名なものの一つが、渡辺榮氏が調査した従一位麗子本である。従一位源麗子は村上天皇の曾孫で、藤原道長の孫、関白藤原師実の妻で、麗

子本は平安時代の『源氏物語』の実態を伝える貴重な資料であるが、これまた戦災で失われた。ところが渡辺氏が麗子本と同時期に調査していた伝五辻諸仲筆本が、今日では米国議会図書館本に所蔵されていることを本論文で究明した。議会図書館本は数人の研究者がチームを組んで調査し、菅原氏もその一員であったが、チームの調査後も研究を継続し、上記のことを確定したのである。第五章は、いったん歴史の闇に隠れた『源氏物語』の伝本を再発掘した貴重な報告である。

第三篇は、序章以下、第一章 『源氏物語画帖』の詞書における鳳林承章サロンの人々、第二章 『源氏物語画帖』の絵における俳画師立圃の影響、第三章 立圃作『十帖源氏』の本文構造、の三章からなる。

第三篇では専修大学図書館所蔵の『源氏物語画帖』を中心に俳諧師野々口立圃と『源氏物語』の関係について考察する。『源氏物語画帖』は貴重な資料で、先年本学から博士号学位を授与された井黒佳穂子氏が絵の部分について考察を加えたところである。本論文はこれを踏まえ、立圃の俳画と画帖の絵についての考察をいっそう深めた。本篇の白眉は第一章にある。『源氏物語』の画帖は、江戸時代に多く作られ、絵と詞書とからなるが、従来の研究は絵についての考察が中心であった。本資料は手薄であった詞書筆者について網羅的に調査し、それが野々口立圃と鳳林承章を取り巻く人々から成り立っており、後水尾院周辺の文化サロンを形成する人々と完全に重なること、さらに備中福山藩水野家との関連についても明らかにした。本資料が各巻の詞書筆者が判明しているという幸運はあったにせよ、古今伝授、伊勢物語講釈、歌仙画帖・徒然草画帖作成など、当時の文化全般に目配りをして、詞書筆者のネットワークを究明したことは、近世文化研究の上でも貴重である。また画帖の制作年次、制作事情についても究明し、それらについては間然するところがない。第二章、第三章においては、俳諧師・俳画師としての立圃と『十帖源氏』の関わりについて考察する。特に本文は梗概書の正統な文体であり、それに俳諧師とし独自の視点を加えたという点は首肯できよう。

本論文は、このように『源氏物語』に関連する貴重な資料についての報告であり、詳細な検討によって穏当な結論を導き出して、新見も多い。対校資料の選択などに精粗があり重要でない伝本を加えているために結論がやや不分明になっていたり、「鳳林承章サロン」という定義には多少の疑問が残るが、膨大な先行研究を咀嚼し、特に専修大学国文専攻の先学の到達点を十分に活かし、その上に立って独自の見解を打ち立てた点は優れたものがある。

以上、審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。